

聖中だより

<http://schit.net/tama/jhhijirigaoka/>
ユネスコスクール・コミュニテイスクール



学校教育目標

- ・心身ともに健康で実践力のある生徒
- ・深く考え進んで学ぶ生徒
- ・人や物・自然を大切にする生徒

全員が「花まる」の合唱祭

校長 麻生 隆久

10月18日は今年度の合唱祭本番でした。当日は、御多用の中、たくさんの保護者や地域の皆様に御参観いただき、誠にありがとうございました。

さて、昨年度は、まだ新型コロナが2類であったので、肝心の音楽の授業でも、様々な制約がありました。それでも、合唱のすばらしさを少しでも体験してほしいという願いから、コンクールではなく、「合唱祭」という形で3年ぶりにホールで歌う取組を復活させました。とはいえ、さすがに、コロナ禍以前のような合唱とはいきませんでした。それでもベストを尽くし、とくに3年生の取組姿勢は、後輩たちに良き手本を示してくれました。

あれから1年、今年は、昨年同様、全クラスに、その成果にふさわしい賞を授与するとともに、コンクールの要素も取り入れ、全校で1クラスのみにも最優秀賞を出すことになりました。しかし、中学校時代の1年間の差は大きく、全校で1つだけとなれば、一般的には、3年生に有利な賞であると思えますが、それでも、下級生の中には、そのようなことは意に介さず、本気で最優秀賞を取ることを目標にしているクラスもありました。逆に、本番1週間前に、3年生のリハーサルの学年合唱を聴いて、正直なところ、2年生の方が、最優秀賞に近いのでは、とさえ感じました。ただ、これまで、普段の学校生活はもとより、体育祭や修学旅行で見せた真面目さ、仲間との信頼関係や団結力などを考えると、今の3年生なら、本気を出せば、こんなものではないはずであり、中学校生活の最後の合唱祭を不完全燃焼で終えてほしくはないと願いながら、どこまで作りあげることができるか、心配な気持ちと期待感とが入り混じった複雑な心境で見守っていました。



迎えた当日、私の心配は、まったくの取越し苦労でした。開会式の全校合唱の校歌は、練習の時とは全く違って、広いホールに響き渡り、皆の気持ちが伝わってきて、そのあとの発表が楽しみになりました。その期待通りに、最初の1年生が、学年合唱を明るい雰囲気ですっかりと歌ってくれました。直後の1年1組のクラス合唱はトップバッターとしてのプレッシャーをはねのけ、とてもはつらつと元気よく歌いきってくれました。当初の予定になかった審査員特別賞としての奨励賞が与えられたのも十分うなずける発表でした。続く2年生は、変声期で声の出にくいといわれる時期にもかかわらず、練習の段階から真面目に取り組んでいた成果が発揮され、どのクラスも、会場がしんと聞き入るような上級生らしい合唱を聞かせてくれました。この時点で、この中から、最優秀賞が出るかもしれないとさえ感じさせる発表でした。そして、いよいよ3年生の部。どのような合唱を聞かせてくれるのか、固唾を飲んで観ていると、その学年合唱は、1週間前とは打って変わり、さすが3年生だと思わせるもので、嬉しい驚きでした。その後のクラス合唱もどれもとても素晴らしく、甲乙つけ難いものでしたが、その中で、見事3年2組が最優秀賞に輝き、上級生としての存在感を示してくれました。



今年の合唱祭の成功は、実行委員を始め、指揮者や伴奏者、クラス全員の力が結集された成果であり、まさしく全校生徒に「花まる(満点)」をあげられる観ごたえのあるものでした。この聖中生らしい、仲間を大切にしながら、物事にまじめに取り組む姿勢を、これからも伝統として繋いでいってほしいと思います。

